



関ヶ原軍記 二編 三四



へ遠13
2207
17



特 13 遠
2207
17

凡士農工商も夫々の職を家業として務めたるものありしが
今日を管むる世も一般に然るに世に寫本の巻中小冊の白紙
何れ種々の書入又ハ紙を賣る者も亦獨り人感見甚き
男女の陰癖を畫き君臣父子の中や西と云ふの合事
間々多し是等ハ必竟一時の興に乘りての戯畫なり
其職分は道具一疵付のハ解と云り著述拙く筆者の誤り
何れも只言語と云く其遇と云く各免卷中の戯畫樂書并繪
池田屋常は是を欲し然不復作一圓て奉代て諸君子所あるの爾
磨石山人識

和漢

貸本所

東京牛込細工町

誠光堂

池田屋清吉

園ヶ原軍記武編卷之三



目錄



- 一 山口玄菟允 水州家ノ使者は返答
の事
- 一 并前田永洋定出陣の事
- 一 水州勢小松の城と云國む事
- 一 并前田勢大層寺の城は押寄る事

牛本
池清

関ヶ原軍記武編卷之二

山口玄蕃元加兵衛代使者(返言の
事)

并前田家評定出陣の事

曰く丹羽加賀守長重は不慮乃
事之御款中故是備一
前田家といつてのく不和故

ふつと知り肥前守利長を四方
余騎の大軍とりて小松
此城を押しつゝ又加増する長守の
武勇を高くしつゝのりとも
新堀を築きたり利長を軍を以
てけく銃所とせしむせ大層との
城は押しつゝ山口父子此の芸
大層獲りてつゞき

大の千戦ふ金沢高田藩人
吉田信吉先陣として押し
詰る飛人先屯し大層寺
此城の危をのり破る高田が
働者百人千秀でしが終り
討免む山口武勇と震
りて吉田大軍あつたはる
あく攻めつゝ山口父子

討死して居城を利長破井
れいしんひひして小乃居の青木
純将と攻んと押造ら

去書お回く新し此宿を城
忠を利長よりつくる事
多べしとの語る且母好
賀守長守れたるなり幸しく
衆より遠恨ある人の噂の

破るは能事なりとも悪
いひともしその人の能事
城は是れを思ふしと
一向に不和あり今此侍ひ
これ一羽のごとく破る
衆中何れも悪人なり
とも善の善悪を悪我所
之恨城破く人をさす

さし向れ又大将のさし向れ
いよいよ大抵さし向れ
来長重 内府公の

清味さし向れの時節田家此は
千播さし向れ今さし向れ何とさし向れ
関東の清味さし向れありさし向れ
や唯さし向れさし向れ田家さし向れの
根あるゆゑ部のさし向れと

評判さし向れさし向れさし向れ
大平飛さし向れ長守の軍務さし向れ
律法さし向れさし向れさし向れ
ある大将さし向れさし向れさし向れ
宛免の者さし向れさし向れ
小松殿拾三百石の小所さし向れ
大さし向れさし向れの大小さし向れ
の遙さし向れさし向れさし向れ

軍法を大小名に考るべし
其類類を天下と治むるは
其武徳を養ひて之を以て
つて之を以て小名に考るべし
續く人ありて治むるは
心腹を毛取置るありて
子のうびに治むるありて
全く石田之類に考るべし

天下地部を逆徳の一味と
るに考るべし
去程小前田宰相長丹羽
賀守長守海横手及び松
合致す及むるに考るべし
子のうびに考るべし
逆徳に考るべし
其考るべし

佐奈田利長軍会城信一
小松の城を攻め此一風吹頼り
あり依く物玉守送流と力此内
大層此城を山口吉富元峯より
中李の城より来りて長重より
後トヨヨハ和忍の利長大軍と信
より由緒あり味方あり一楠頼
より一トヨヨハあやうるべまこ

依く一二ヶ所一義城より一某
一も軍会城跡一此一
て南城は来り一方城又去く
お跡くべ一を根よりあり
常田勢を来りるれは新と
某一楠頼り頼り馬の去らせ
る勢之と一物より長重の武
迎返達の人よりて急度と

おのひらの利長大軍を寄せ
来るとも階我まへに何条地
の手と借らんや又山口の孤直
て義城お討りむと迎もそれ
格別なりけ度秀頼の以下初
ありとの急ないむと初雅あり
能くば我石固り運急なり絶
こつ年あはば危角利長と扱

戦ふ子押をな 内房公は
中兵くべし弓矢は義利
赤田泉乃候候跡清ら車に残
ねんあくのさうひるりして
山口よ向ひ山中の作せの再り
徳新より義城成てのあ
とくは水の底に喜本純作
教養より大長刑部少輔なる

まづりに級軍もまづくは其
上南坂未だ防戦の用なきも
俄り集むる事あらんを念糧亦
大ひく不足あり合戦ありあふ
りど利ありとも念糧をくく
を糧あくはえしゆちを思ふ
居城を籠りありし敵を圍
みて馳攻の席に長重落りて是

まづこの条お遠よりあはれとの返
答也依くそ飛り及むる言葉
尤も大聖寺に城は陥り事利
このせり前田利長より使者に
訊く山口言蕃元より
送るるに石田三成が送る
船をいれしんらんをいふあ
東園東乃涉味方なり余のく

軍忠を抽んぢらるるに
利去能き年 吹巻致さべしと
中送りりぬむ山口父子並びく
家長等迄おろしんで 奮急
志するに玄蕃元も知ある大將
あれど好く思あんし
其し中 包裏其身がんし
少ゆき 嫡子衣宗元 並び家入

昔此心 庶事任せしるありし
時く息衣宗元をさし出く救く
父子を別して古右衛門の御恩状
添く 慕むりゆゆき 秀頼の
山下 知と是るるに 於てい又ふ
し けし けし けし けし けし けし
むし 得去石田大首 友人の 催
促故子の 人 志武の 義利

此条正一致の旨に正しくつて制ち
執年仕りゆて滞籠本より集る
原よりして此年中に集るも新嘉
あり此後より海しく頼ま入との
返言より使者を金沢に送りたり
されば利者の不急よりくささ
出さるべ不破寺と使者として
小松大聖寺に直城はきり

手侍とお伺ぐらせしとさう
山口も衣乃返言故叔さうのく
款もお極やうよりそのうと
いそ地出陣して小松の丹羽長
重大聖寺に山口吉蕃元小の
店の喜木純伴と政教
そんより大谷刑部討拂ひて
近江海軍出張一宮東一忠

義を以てしるべし
城集めて軍兵評定城をめぐり
先小松の城攻撮んとてその
軍配も利長のいりし聲前田
討つる長程に城中は四外山
城を守らせ又利長の備前響
高畑石見守定吉と居城重沃
れ為る石と定めを長計に流す

合身前田能登守利政城百具
く於合その勢は万全騎の急
討して全沃を流すしと相登
福見水碓も大井寺井おの
端々小松の城は日づら八里の形
程城集めて方々小松の城下迄
押身しりつと城中は老老
大さきし強敵を流す去るに

武常流福の人あれは先を橋
城持陰り其後麓城の沙汰
及びて城の麓をとおるなり

水尾勢小松の城城を圍む
兼平田勢大寺寺此城は押
寄する事

城はけ付子母が長らる坂井

武常流福の 江戸之所在幕門 南
城を在幕門お城初めりて
を押しそくおおく安東川
の岸に柵一重のりて 麓城立
くお付りり重活勢この新に
押し付く一目尺くあり流る
しに款軍れ有候り城のり小
勢のり又後り小柵一重あり

いぞいぞと申すは、おやがりて控へる也
と申すは、と申すは、この世の
恙事之と云々、堀石、利家此
目利、おどろく、横山、山城守
衆を、嶽として、初め、その出陣あり
うつく、大い、く、名ひ、する、決意
お、一、目、足、多、大、い、千、お、ど、ろ、ろ、ま
徳軍と、割、して、付、惣、搦、一、決、押

破らん、る、最、安、身、る、り、あり、は、れ
た、向、の、小、松、の、城、より、大、筒、城
お、を、ん、の、約、と、ぬ、く、大、死、ま、せ、
その、と、長、守、の、り、ま、を、ま、く、り、
合、利、の、ご、と、記、大、お、あり、さん、を
ま、の、城、責、は、他、法、る、ん、を、む、り、ひ
城、を、ま、ま、と、い、ふ、と、惣、大、お
利、長、は、や、ま、り、て、本、場、む、の

之旨といふところありし身城つげきは善
徳して軍をよば利長は下知と
して横山山城守山崎長門守友
人城さし置れ能ひぢあさる寺井
のむぐし三堂山より本陣は
居られ四万余人の軍を透向
船く陣をえりく小松の城は
固まりりいりぬるおえ苦しむる

倉紀より振るり丹波長重れを
長坂井よ左衛門の古今より秀で
し英えい雄乃兵あり今利長大
軍を陣し置り城おそく海
く思ひくおん惟りある欠出く
敵陣は終がせしといふ守田
右左衛門といふ老けは築城陣
よりもしむる小忍びおく三堂

山よりけき不意に押入り歎
ふと武騎討多し立陣の
せつおしひけて執うの勢を
軍はさへしと浪進を去る
この手物成獲員してその
よそ割し中りるの常回替は
徳へ度重なる又さるり重
の余りたるゆりさく仕換
まへり

らんと止めたりは男に
用急はえ来城小松の志
留害を双の名捕り搦手
かし沙弓車故本打所と
まて手配りと礎とお定
み籠城の用意調ひたり
母の人の殺る日づつ
人あり大海を手に持
く

やうにお名ゆらとりく 左長重元
末武常の人としてまきくも
居た代 敵陣破窺ぐひ 透男元阿
らば 突出んと 侍をとりけし時
肥前守利長の 志長守山 志を
長房徳云 一りの 柙け小松の
城を 破り 害といひ 今 双方の 良将
との 長守 楠義らゆ 堪あるり

今上江口 坂井木の 武常阿り
志らるに 味方 大軍 城あんで 一旦
攻め けし 放り 志を 破り 城の
まらるとも 味方 元多 勢と 拵む
居るあり 危角 南 城も 志
小長守 志の 大軍 志 城を 攻め 志
して 山口 又子 志 攻め 志 志
城の 志の 志の 志の 志の 志の

長重を攻らるべしと練あはせ
む利長方れ此城を之と連
小松の城の押へしとて三ヶ山
の向ひ城も是時彼中不彼
大學とのそし阿ま八月朔日曙
千順路をとる是山鞍之御幸
隊中陣ととりて小松の城は
をりらんば本所町と自焼して

かーそ油所あり透向も所
らば實おんる根之大勝利長を
弓矢利發して下知あるは
とらるる在陣を結ぶべし
其款事不意と討つ時の必定
敗軍は之と連大聖寺に城押
法らるる小松軍名を整へしとて
法長刀の思目よ輝き野山の草

木を皆軍兵と疑ぐらるればよ
長重は体と見くを臣坂井よ
左衛門下知せしれらるる敵の目
小隊多し大軍あり去るが
を辨れ多少と尋るる
大將下りて度あり花やうよ
一戦して徳人の目と驚り
と中へさんたをふたすの利ら下

知を傳へく古田入を傍りし子
六百人城を居る清田とらふ西へ
つらりし敵の利を去切らせ
又足輕百人と銃砲六百挺は
そくく灘の海へ流らり
斯多古田五を傍 榎井源太郎
友人を利長の援陣へあき
りうらりて岡の急城あげ

漢炮城ありゆく漢を入きて
走りまゝ前田家此同様の思ひ
も寄るゝざら車あるを大いよ
周章終て今澤勢のさざれ
立く放軍是是今却小松
の城より打く出んるゝの實
ふぞんぞも寄るゝざら車あり
此時大將利長の合費前田能也

寺利政ありび千高山志を長
房の味方此敗軍はる城見く
也惜身事く思ひ馬を急返
して後を去るや執しと交せ
んと後去るの軍をたの板井と
左邊のとも大おとて古田大を衆
橋井源を本武勇と震ひは万全
の大軍と討果は此時ありと

經之急手攻立らんば前田勢馬
城立うまう放走は母孫軍
乞の孫岡城揚く難あく幸坊
村岩の城は出入り重活勢
大のし終ぶさりや援陣
軍有く味方打負りし
とも利長軍令正し
あんなり魔身立く味方急

級軍もまきまき中と床机し腰城
扱て捕を死に脱くに値ると
そる城を捨も大山乃ごとく之
うく小勢よその戦うひと交
せん事おのひを奪うどと足
るありそ肉子子孫乃軍をた
の城中へ引入らんば金活勢
大聖すれ城は押造りあがり

余人の軍令を
弟も亦も皆軍勢の如く之
池清

軍系軍記二編巻の三
池清

池清
関ヶ原軍記武編巻之四

目録

- 一 山右系兵北郡辨と執り事
- 一 并右京免持中は列入る事
- 一 富田系人由編略傳の事
- 一 并藏人加州系は石抱へらる事

池清

関ヶ原軍記武編卷之四

山は右衛門うまのまけ 加州かう 勢と戦ふ
事

并志京電城中しやうのまち 引入る事

後小加賀の圓大寺おほのせうだいらでら 此城こゝのまち 至山
口くち 至いた 電でん 元もと 同どう く 崎さき 子こ 右みぎ 京きやう 電でん 中ちゆう
古今ここん 精しやう 奇き 英えい 雄ゆう の 大おほ およして

大力量早業弓矢をての達人
あり父玄蕃元と四万石在る業飛
の二万石城跡して古左衛門の忍と
深く慕むら又此度大谷吉澄も
小玉筋の要めりふこの山口城
このみあり之既手籠城の会士
城跡の時父の玄蕃と秋子并びよ
衆人おもしりゆきは情交夏の

ありのうれ前田が大軍を小雲
の城を攻急く南城城跡どり
寄て来るふ城修り居らん
弓矢の面目と失るるあり竹松
も敵方より杉の山寄りざらふ
へお出でまこと評定し
我々寄りぬ衆人山口源左衛門
成田清左衛門同く森吉原松

井家助 版四一学おと先と
く 寤寤の侍ひた百金侍と撰
と 雑乞二百余人を城の中と押出
し 城下此福橋とあり新より
とりて一付千 福波の声と揚
りり利 去の先陣を南佐馬守
回 爲人 長九所左邊の 山崎
去の ちる等 彼乞を百金侍と

順くと城下一押つり同く福波
の 聲と合せて鉄砲打立
双 方鉄ひ 突中より 砲り
運 強去大將利 去と此時や陣
り 是らん 急り 忠告 誓りて 本
陣より 大筒を 射 城へ 城
と あり ちやうさんと せむけ 家
通 れ 大將と 皆 是く なる 頃と 奏

長又年八月二日陣平晴て
朝日輝りけ時大將利長石
臺山の以て千細殿此鑑を
总ざれ金乃福尾の塊をい
ま宗砦を振く座机より
士年より下知あり志うんが款
出へまよりの杉のりま又山の麓
の合衆能登り利政ありび

高山衣近長房陣よりけ
せり山口衣系を丸の空より石臺
山を尺渡して是天のあり多
とらら大將利長と見へきり連
名ひ寄るに籠橋より園の寺を
よく見竟の武士が鑑を掛へ
て宴おより世より先手
待へる石臺山の下より押出

く前田能光も高山左衛門
立て残を合せんといふ
る心もやき大將といふ
おと其儘了りりりり
決掛へく只二子三子
討てて切捨高先も
く追立りり利政長房
られ石堂山の左衛門

故軍は山口大平
士年く下知して利長
山より唯この一戦
立りて下知して山口
番つと始りて成田松
田本錢を引提く石堂
欠らる通れ危く身
前田能光も利長も

よ飛車と名付く入槍挺の長
筒そ十餘玉の銃砲打立る
編子百子乃雷火流る
かごとくあり候く志先進
この阪田一学村井玄蕃と外
橋田成田お虎亮れさぐひた
忽ちお虎亮さうが故は
お猛虎山口が軍急来とソ云

お列乃前後の銃砲筒さる
とらく玉筋と打下
おお武百余人お殺さる志
もそ飛子及ん味旨とたて
竹束りる敵をさき斬り
あつくと下け炮より
志中藤を返してえの
引退さか加賀勢の追討せよ

追^お追^くるる石堂山の利長此^こ軍^{ぐん}乞^ごす
ま^まりりりあてて追^おつ^くりる籠^{かご}橋^{はし}を
衣^え系^{けい}之^の大^{だい}喜^きあ^あげ鑊^{くわく}炮^{ぱう}の^の内^{うち}免^{めん}
年^{ねん}し^しそ^そ追^おぎ^ぎきた^た色^{いろ}錢^{せん}く^くあ^あ
ば^ば返^へく^くや^やく^くば^ばと^とて^て士^し年^{ねん}こ^こ下^げ知^ち
して返^へせ^せく^くと^と呼^より^り色^{いろ}ば^ば一^{いっ}番^{ばん}
名^なく^く返^へく^くら^らの^の丹^に羽^う織^お部^ぶ大^{だい}
乃^な寺^{てら}舌^{した}舌^{した} 嘆^{なげ}山^{さん}平^{へい}肉^{にく}お^おる^ると^と並^{なら}

危^あく^く名^なて返^へく^く加^か刺^し利^り長^{ちやう}の^の小^{せう}
性^{せい}九^く里^り九^く房^{ぼう}一^{いっ}番^{ばん}千^{せん}石^{せき}付^つり
この^{この}時^{とき}山^{さん}口^{くち}衣^え系^{けい}之^の大^{だい}喜^き持^{もち}く^くる^る槍^{やり}送^{さう}送^{さう}
手^てに^に名^なく^くる^るん^んの^の苦^くを^を明^{めい}く^く実^{じつ}
伏^ふせ^せり^り鈴^{すず}より^{より}續^つく^く長^{ちやう}時^{とき}九^く房^{ぼう}
衣^え系^{けい}之^の大^{だい}喜^きあ^あげ^げ鑊^{くわく}炮^{ぱう}の^の内^{うち}免^{めん}
系^{けい}之^の大^{だい}喜^きあ^あげ^げ鑊^{くわく}炮^{ぱう}の^の内^{うち}免^{めん}
一^{いっ}錢^{せん}も^も入^いら^らる^る長^{ちやう}が^が名^なく^く返^へく^く返^へ
一^{いっ}錢^{せん}も^も入^いら^らる^る長^{ちやう}が^が名^なく^く返^へく^く返^へ

追進^{おひし}らんバ^{そら}後^ご部^ぶ利^り長^{ちやう}の^の籠^{かご}布^ふより
教^{きやう}形^{かた}も^も此^{こゝ}部^ぶ利^り長^{ちやう}の^の籠^{かご}布^ふより
山^{やま}田^{でん}出^{しゅつ}羽^うを^を進^{しん}ま^ま来^きりて^て大^{だい}所^{しよ}此^{こゝ}籠^{かご}
成^{なり}り^りく^く款^{くわん}の^の是^{こゝ}成^{なり}籠^{かご}立^たく
我^{われ}る^るす^すご^ごく^くに^にせ^せり^りと^とて^て去^こ士^し
を^を進^{しん}む^むる^るの^の勢^{せい}ひ^ひり^り欠^か立^たらん
右^{みぎ}系^{けい}免^{めん}が^が軍^{ぐん}を^を系^{けい}深^{ふか}ゆ^ゆ処^{ところ}干^{かん}
利^り長^{ちやう}の^の籠^{かご}布^ふ二^に子^こ余^{あま}騎^きう^うく

追^{おひ}進^{しん}る^る博^{はく}念^{ねん}を^を骨^{こつ}色^{しき}く^くら^らく^く款^{くわん}
の^の形^{かた}子^こ代^{だい}の^のゆ^ゆく^く右^{みぎ}系^{けい}が^が馬^ば也^{なり}
ふ^ふき^きや^やり^りく^く武^ぶ老^{らう}二^に籠^{かご}騎^き斗^{たう}
子^こ討^{たう}成^{なり}さん^{さん}ち^ちう^う及^{及び}を^をば^ばし
了^{りやう}る^るあ^あく^く板^{ばん}中^{ちゆう}一^{いつ}引^ひ入^いり^りあ^あが
兼^{かみ}て^て案^{あん}内^{ない}を^を知^ちり^りく^くり^りらん^{らん}の^の鐘^{かね}
の^の在^あり^りす^すり^りく^くと^とり^り入^いり^りあ^あり^りけ
良^ら右^{みぎ}系^{けい}免^{めん}が^が乳^{にゅう}母^ぼを^を乳^{にゅう}母^ぼの^の大^{だい}別^{べつ}の^の

女らし志系免と通く入る虎口と
急後よりより奇手は執轄ひ
手去却をめて大原寺の城を
是法りり

留田飛人由緒畧傳の事
并藏人加判へ百抱下らるる

の

曰く留田飛人多鐘の虎口射く
お鉄くひ翌日去青雲一
討免其山口志系免をくく
徳人の目とおどろく
利去下知頼りて終り
徳軍勢急破る山口父子生害
して居城を加判利去大軍を
執方の國水の店を責んると云

城をむ後々々喜本紀作書致
一後進より大谷刑部少輔大軍と
年一々執事の四城平均
とととと又深畧と取く前田
利長と發し仍く托あきる兵
と年一々居城重沃は歸陣
の良小松の城より丹羽加賀守長
重代志長江口三所左邊の云と

をめて利長の後殿長九所左
邊つを追をる去り去り故山
又右田徳守と追おるく江口
が武常小西より車轉く丹羽去
重の二陣く續ひく前田康代
大軍小松の城に被りし
大軍より返りし丹羽が軍
は小松へ入る新田を前田勢

る金法は行通ぞく

云々云々曰く凡そ人言者の
一生涯の内そ難と論じべり
らば時宜なりとく人あり
換益有とあり在富田藤人
が身代とそ論じらると記の
是難言とありありそそそ
養ら奉るありん甲斐の國の

大禪師南化和尙の中さそ
しそりり或人和尙のそ
そそ人の言とそそそ
南化和尙の中さそそそ
人言たり其のそそそ
くりやな命ありそり南
化の曰く凡そ人言とそそ
そそそ知るざらありそ

成れば 一と一と
後悔あり 其れ 此恥辱
を 言へん ところろを 言へし
く 大長根 とも 言へ 言ひ 知色
も 又 行や 能事 事あり
ても 根りよ 言ふ 事ありん
何や 一の 仕人 一と 言ふ
も 知色 辨一 只人 一と 言ふ 後

あゝ でのい 其れ の 一と 知色
難事 の ありと 言へ 言へ
これ 其れ の 理あり 難事 時
平生 此 人の 所あり 一と 言ひ
其れ 言ふ 一と 言ふ 一と 言ふ
らん 言ふ 一と 言ふ 一と 言ふ
何や 一と 言ふ 一と 言ふ 一と 言ふ
知色 難事 一と 言ふ 一と 言ふ 一と 言ふ

ともある人ぞしるそれき
唯学者ありし人尼の次子
甲斐の信吉の与らせん
この夏あり

夏も前田肥前守利長を能く
人を見知らせしむる身も中々
意深き人也前田藩人たるは
この夏この事と父利家等とむ

大さき年安松放さしむる利長大
おの急あり我素むら夏ありと
悦らびぬる柳井富田藩人
を信濃守の信吉と武常の達
人ありお方の世の人様
この夏れの前あり夏時より
大岡秀吉公の終子実を秀次と
仕へ大いし出陣して一百万石願

一 万石のお法おほりの山やま相あひ手てそそ武ぶ
常つねの結むすく縁ゆかり色いろこり志こころうら白しろ子こ
秀次ひでゆきを太閤たごう乃の以も不ふ審しん試し象さうむり
あひさる山やま入いく山やま生せい害がいあり
よつてついで龜かめ長なが木き村むら年とし人ひと正ただ一ひと樂がく屋や
松まつ原はらおと初はつめめと一ひとしてしてこころこころく
免まぬ飛ひ又また遠とほ鴻わづらひも奉ほうら富とみ田のり為なり人ひと
あんとあんとの茶ちやの根ねを分わかててもも尋たづね

いづ切きり抜ぬをさそそららぐぐ者もの之の
所ところ廊らう富とみ田のり為なり人ひと洛らく中ちゆう洛らく部ぶの
過とほく一ひと志こころれを建たててりり生せい録ろく表ひょう
を秀次ひでゆき乃の為ため事こと何なに月つき幾いく日ひ小
野のの松まつ原はらを切きり抜ぬは人ひとくく洛らく
出いのく一ひと備ひへ平ひら吊たひひの念ねん仏ぶつ
決けつ頼らいななずずると書かききこりり友ともああまま
ぶぶ物もの見みるる洛らく中ちゆうれれるる之の

たれば糸部の高約をけし
觸り終り切後と見しる
これの定めて見のありん
今高田の群集しるき續を
お集りぬも痛し事
うねいづりし切後しるごと
見渡さふ志中しるき續二御
るしるく白布とぬしりさ

大勢集りし後しるし
富田屋人の白小袖し下袴
し後ら茶せんしして巻の上
お居るとし方に巻紙を
出る見物のありしけ
念佛し志し知し海
梳し武士の志と感し
志事しし深切ぬのありし

物語り 是ら子の良き 恙なくや
この在妻女并びに 嬌子 執後
も来り居りしに 痴人 多日
此の しみは 毒れ 名跡あり 壺
ちんといふく 宗祖 教壺 色
して 夫より 子供 人おつて
照る 壺の きり 是と 是ら 子見物
の 若者 ともや 急物 回向 とも 幾切

是らといふ 在 永引 在く 退居
て 大言 ともや 切き といふく
程 痛みの 切ぬ とも 旬 とも
人 是ら ともや 重なり 群集
して 是ら 恙なく 社 ともや
と 程 ともや あり 時 ともや 宗祖 の際
とも 是ら ともや あり 是ら あり
中 ともや 是ら 人 ともや 大酒 ともや 是ら

醉^{さい} 泣^なれ 亦^{また} 母^は 新^{あらた} の 悔^い 一^{ひと} 子^こ
 雷^{かみ} の ごとく け 知^し 止^め さ せ 足^あ 物^ぶ せ
 ほとと人^{ひと} あり づれ を つる しく 狂^{くる} 集^{あつ} る
 此^{こゝ} 中^{なか} にも 司^{つかさど} 代^{しろ} 職^{しやく} とも 礼^{らい} とも せ
 多^{おほ} くの 事^{こと} あり 恙^{しやう} なく 知^し り 又^{また} 今^{いま} 朝^{あした}
 より 此^{こゝ} 群^{ぐん} 集^{あつ} 決^{けつ} 依^い 足^あ しく 狂^{くる} を 手^て
 及び たり たり しく 秀^{しう} 吉^{きち} 公^{こう} より
 此^{こゝ} 下^{した} 知^し たり して 子^こ の ごとく び 秀^{しう} 次^じ の

為^な 子^こ 狗^{いぬ} 死^し する べ 禁^{きん} 制^{せい} 也^{なり}
 い ごと 追^お 拂^ほ り 度^ど あり 子^こ の 中^{なか} 之^{これ}
 依^い しく 彼^か 人^{ひと} 目^め 身^み 来^き り して 見^み 物^ぶ 決^{けつ}
 たり しく 心^{こゝろ} ひり ぎ ぶ 狂^{くる} 人^{ひと} とも 追^お 身^み
 去^い たり しく 追^お 後^ご とも 法^{はふ} 度^ど あり
 とも 筋^{すぢ} 来^き り たり ば 畏^{おそ} かり たり け
 と 恙^{しやう} なく 用^{もち} 意^い あり 狂^{くる} 集^{あつ} る の あり
 て 自^{みづか} 分^{ぶん} の 表^{あは} け 歸^{かへ} り たり 此^{こゝ} 事^{こと}

洛中に隠れ物と云ふひと
ぬり病人が胸元を能病の沙結
と来くは後古容よりも病
人がぬるぬるありけり志んを
只能病のみれ沙結して能一人
謀略ありとい心身人ありは良
菊田利家と入を此身二あり
嫡子利吉も在伏見を居るん

り病がぬり病と云ふ病
者たるは抱へんと云ふ之を
いづれべしといふ事新と
相尋子り病が洛中へ遊るる
信長してみけりといふぬり
一石の巾着をお遠く宛
りあるは書がらの中へ
らん菊田利家人稱退治くる

さうもいふに本一此の原意を
自出の財一命と病一その目利
のやごとと反古の仕とと
清浄中より此時衆中此徳士
おの大いの子懐けり後立して
能病者の免よそのあるは猶死
の備り所の用より立てるに榮け
やする命と懐け存するのの

正抱へらん高録法持りる利長々
此の心慮社心なるをといふは父大徳
言利遠郷を大い子懐びあひ
我免きは二箇中の大さるる心免
好く思ひに今交還因縁人
を正抱へある急帯より後て大い
小安結結より彼病人の武勇道
一物必合我干冠山を

よして徳人の稱しける武勇此
者也又は度の謀略をのぐれ飛
の逃れごとくしと知り竹も
まぐさやうるく却し流りて志り
ごとくものあり謀略を風の舟水
車下り坂の軍ししてそりり
かう記秀吉と謀りあわせしる
大まざる横急のあり一蹴の

時の必しは度利長が恩賞
ありしまぐさうるく却し流りて志り
ごとくものあり謀略を風の舟水
車下り坂の軍ししてそりり
かう記秀吉と謀りあわせしる
大まざる横急のあり一蹴の
を技持しごとくものあり
利長を始り四持大名斗りし
あはれ軍勢はこころがける
在安徳ありとて懐びのひが
果して此度まで長く経病なく
参れをあり

池清

寛平系軍記二編巻の四終

池清

魏

譚

書

倭

軍

書

唐

軍

書

隨

筆

物

國

々名

所

近世戦争書類

滑稽物

繪本

書本

曲阜馬琴之作
其外諸先生作

軍書

歌討

諸家騷動

御捌物

右々外數品此座比写本説々程奉忍也

書物價目本所

東京外込細工所

誠史堂 池田泰清書

